



日本遺産とは、地域の歴史的魅惑や特色を通じて我が国の文化や伝統を語るストーリーを文化庁が認定するもの。文化財の保護などを目的とした世界遺産と異なり、地域に点在する遺産を活用することで、地域活性化を図ることを目的としている。和歌山県では、平成28年4月、熊野灘沿岸地域（新宮市・那智勝浦町・太地町・串本町）の捕鯨文化に関するストーリー「鯨とともに生きる」が認定された。

**【古式捕鯨の歴史】**  
鯨は古来より、日本人にとって大いなる海の恵みであった。熊野灘沿岸地域では、江戸時代初期より組織的な古式捕鯨が行われ、当地域を支える基幹産業だった。その後、明治の大背美流れと呼ばれる大惨事に直面するまで、数百年に渡り地域全体に利益をもたらすシステムとして、人々と共に時を重ねてきた。

**【捕鯨が育んだ文化】**  
熊野灘沿岸地域には、鯨にまつわる祭や伝統芸能が多く伝わり、また捕鯨の役割に準じた苗字や地名が今も残っている。それほど捕鯨と熊野灘の関係が深かったといえる。



**太地町立くじらの博物館**  
1969年に開館した世界でも珍しい鯨専門の博物館。太地町に伝わる捕鯨の歴史と技術を垣間みることができる。古式捕鯨船の模型や鯨の剥製・捕鯨関係資料など1000点余りが展示され、なかでも館内中央に展示されている体長15mの背美鯨（セミクジラ）の実物大模型は圧巻。また自然の入江を利用した天然プールで行われるクジラショーや海洋水族館などファミリーで楽しめる総合施設となっている。

住所 / 東牟婁郡太地町太地2934-2  
電話 / 0735-59-2400  
<http://www.kujirakan.jp/>

**座頭鯨網掛之圖**  
燈明崎沖で繰り広げられる捕鯨の様子を伝える古絵図。ザトウクジラに網を掛け、勢子舟に乗った刃刺が鉞を投げようとしている。危険を伴った漁ではあるが、それぞれの役割をこなす漁師たちの組織立った連携が見て取れる。

(太地町立くじらの博物館蔵)

上 / 早鉞と呼ばれる一番最初に投げる鉞。座頭鯨網掛之圖でも先頭に立つ刃刺が構えているのが見える。  
下 / 長柄は鯨の解体に使われた解剖刀。  
(太地町立くじらの博物館蔵)



**飛鳥神社**  
新宮市の阿須賀神社から勧請された太地町の産土神を祀る神社。漁に出た舟が戻って来ないとき、家族は飛鳥神社に集まり、夜通し火を焚いて男たちの無事を祈り続けたといわれる。太地の人は親しみを込めて「宮様」と呼ぶ。

住所 / 東牟婁郡太地町太地3169  
電話 / 0735-52-1646 (八幡神社勝浦)



**恵比寿神社**  
飛鳥神社近くにある小さな神社。昭和60年、太地魚商組合によって建てられた鳥居は、なんと鯨のあごの骨。現在の鳥居は平成8年に再建されたもの。えびすとは大漁旗にも描かれる漁業神で、海に向こうからやってくる海神＝クジラの意味でもあるといわれている。

住所 / 東牟婁郡太地町太地 (太地漁協前)

## The Heart is continued

**吉祥(きっしょう)鯨土鈴**  
熊野灘沿岸において鯨は、捕鯨の対象であると同時に人々を潤す恵みであった。また九鬼水軍を勝利へと導いた吉祥として、太地では縁起のいいものとされていた。頭頂に描かれているのは和田氏の家紋。

住所 / 東牟婁郡太地町太地2173-1 (抱壺庵工房)  
電話 / 0735-59-2879



潮岬から眺める太平洋。鯨はこの遙か先のハワイやフィリピン諸島、小笠原諸島周辺で繁殖・子育てを行うが、その期間は食事をしないといわれている。その後、夏になると餌であるプランクトンを求めて北の寒冷水域に向かう。熊野灘は種類によっては鯨たちの「海道」なのである。



江戸時代の捕鯨について、その漁獲高などが記載されている古文書。旧古座町で発見され、現在は串本古文書研究会によってその詳しい歴史が読み解かれようとしている。

住所 / 東牟婁郡串本町串本2427  
(串本町文化センター内生涯学習係)  
電話 / 0735-62-0006



**和田の岩門**  
太地の古式捕鯨の祖、和田家の通用門として利用されていた洞穴。古くは「紀伊純風土記」にも描かれ、和田氏はこの内側に4～5坪もある屋敷を構えていたといわれる。現在は手前にも県道が接するが、当時は海岸が広がっていたといわれる。

**大背美流れ**  
明治11年12月24日、小雨の中、総勢100名以上の漁師たちが出漁。しかし巨大な背美鯨を仕留めるのに時間がかかり、翌朝まで死闘は続いたという。その間に天候も荒模様となり、精魂使い果たした男たちは潮流に引かれて帰港できず、鯨も放すが、ほとんどの男たちは荒れ狂う海に沈んだ。刃刺として出漁した北さんの曾祖父は、奇跡的にも伊豆七島の神津島に流れ着き、九死に一生を得た8人の内の一人だった。

江戸時代初期には、すでに組織立った古式捕鯨が始まっていた太地町。鯨の行く先に網を降ろす網舟、そこに鯨を追いつみ鉞を打つ勢子舟。そして仕留めた鯨を運ぶ持双舟など、役割の異なった10数艘が、組織的かつ効率的に鯨を捕獲する大掛かりな漁法である。

昔から、鯨一匹捕れば七浦潤うといわれていたが、相手は10mを超すこともある鯨。暴れば木製の小舟に乗った男たちはひとたまりもない。そんな危険を含みながらも、捕鯨は

300年以上もの間、熊野灘周辺の重要な産業として人々を支えた。「リアス式海岸が美しい太地町ですが、耕作地も少なく安全な道もない陸の孤島。先祖たちは海に出ますが、小魚漁ではその日暮らしから抜け出せません。村には子供もいれば年老いた者もいます。彼らを養うためにも、捕鯨というシステムは重要でした」と語るのは最後の「刃刺」を祖父に持つ北洋司さん。勢子舟の船首に立ち、鉞を打つ勇敢な刃刺。陸上で舟や網、鉞を作り、鯨を解体・加工する者。技術

は今も受け継がれている。

しかし古式捕鯨は、「大背美流れで一変する。子連れの背美鯨を仕留めるのに時間がかかり、百人以上の男たちが波間に消えた大惨事である。その後働き手を無くした太地の捕鯨は衰退の道を歩み始めるが、今の定置網漁業を行う水産共同組合も住民出資と、海外で事業に成功した人たちの寄付などで創設しました。利益の一部は町に寄付されたこともあり、出資者の住民に配当金として支給されることもあります」。鯨が繋ぐ絆、ワケタラマセ、ワガラノエビスの精神は確かに

# 鯨が繋ぐ深い絆 ワケタラマセ ワガラノエビス

は子孫へと受け継がれ、役割は職業となり世襲されていく。「それは数百年続いた優れた社会システムでした。給与が皆に支払われ、遺族年金的なものさえある。まさしく昔から太地町に伝わるワケタラマセ、ワガラノエビスの精神そのものです」。鯨(「エビス」)は皆のモノ。恵みは皆に分け与えようという意味だ。